

## 第Ⅵ章 出土遺物

### 1. 概要

平成13、14年度の史跡整備事業に伴う発掘調査は、第3 罌状区間の石垣から第2 水門までを対象とし、同時に、平成14年度には城壁線の不明箇所に対する確認調査を行っている。調査の結果、出土遺物は整理用コンテナにして2 箱分の遺物が出土した。

また、平成15年度は角楼・西門周辺の発掘調査と、史跡整備に関連する各種の補修作業を実施し、これらの作業に伴いコンテナ箱1 箱に満たない遺物が出土している。

以下の遺物説明に際し、便宜上、第3 罌状区間から第2 水門までの城壁区間と、北門の出土遺物は第161図にまとめ、城壁線不明箇所の各トレンチで出土した遺物等は第162図に示した。また、遺物のほとんどが須恵器のため断りのない限り「須恵器」の用語は略している。

### 2. 史跡整備地区における出土遺物（平成13・14年度）

#### 出土状況

城壁区間の出土遺物は、まず第4 罌状区間の城内側に位置する内側敷石上面から坏B（1，3）、椀形坏（4）、小形高坏（5）、壺（6）が出土している。また外側列石上面の流土からは壺（8）が出土した。

第5 罌状区間では内側敷石上面から壺（7）と土師器の甑（24）が出土しており、第6 罌状区間では甕（10）を表採した。第9 罌状区間の城内側に位置する内側敷石からは甕（20，21，22，23）をまとめて検出し（第55図参照）、第1 水門とを画す内側列石の「折」付近においても甕（18，19）が出土している。

北門の出土遺物は壺（11，14）、甕（12，15，16）、土師器甕（13）である。第90罌状区間の城外側に位置する外側敷石から甕（12，14）を採集し、北門前面に構築された石垣上面からは甕（15）が出土した。また、門道から城内の地山整形痕までに甕（16）と土師器（13）を検出している。

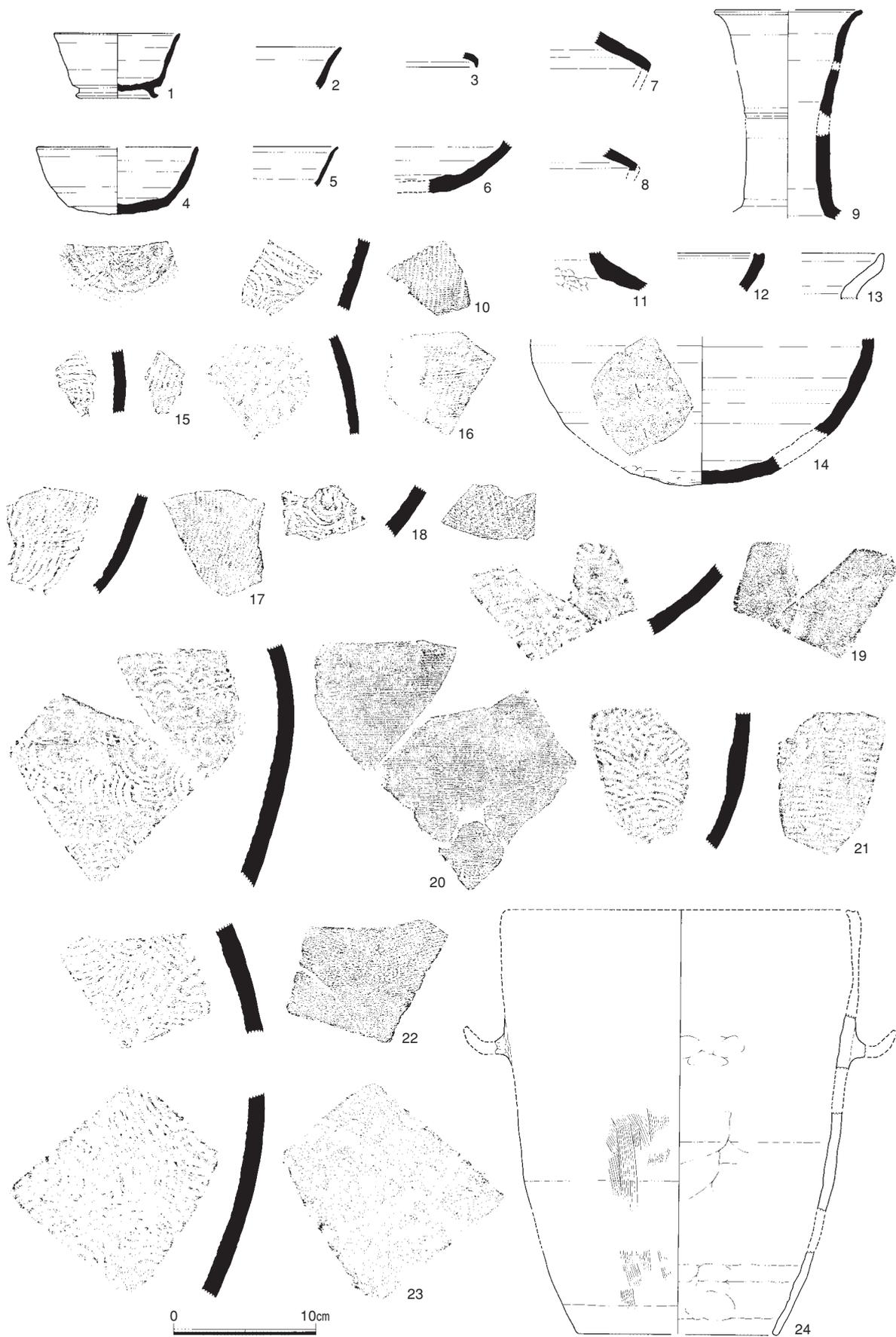
#### 出土遺物

（1～3）は坏Bである。（1）の形状は小型の坏身で口径約8.8cm、器高4.6cm、高台径5.8cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、高台はハ字形を呈し端部を外側へつまみ出す。（2）も坏身で胎土は細かく黒色粒を含み、焼成は良好である。（4）は椀形坏で口径約11.2cm、器高4.7cm、底径7cmを測る。底部は丸みを帯び、外面にはヘラ切りの後ナデを施す。（5）は小型高坏の体部で器壁は非常に薄い。

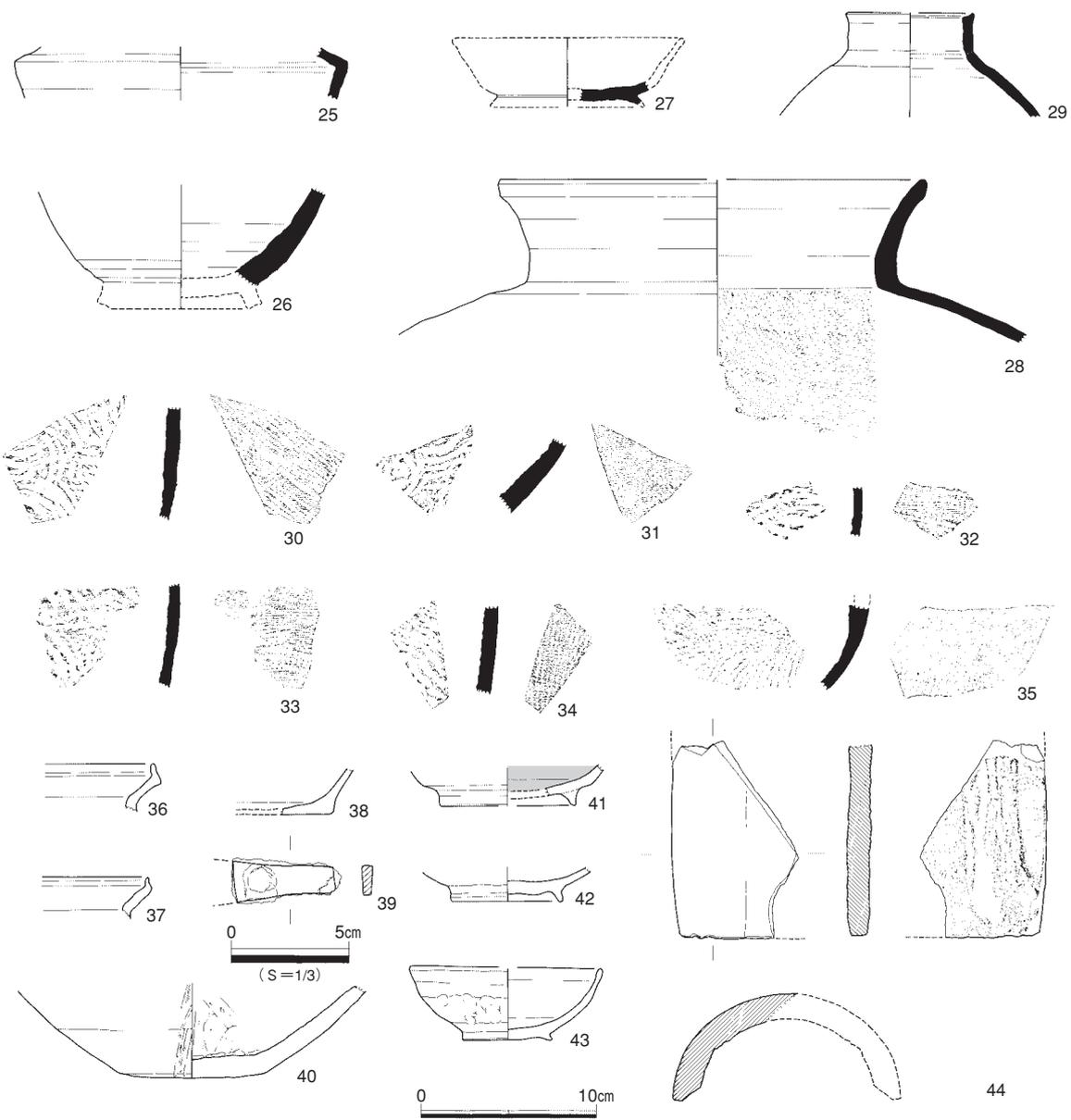
（7～9）は長頸壺である。（7，8）は肩部でいずれも体部との境が明瞭な稜をもつ器形と観察される。（9）の口縁部は外傾しつつ立ち上がり、口縁部を短く外反させる。頸部の中位には一条の沈線が認められるが、本来は数条施された可能性がある。

（11）は壺の肩部で、内面には回転ナデの後に指頭圧痕が認められる。（12）は甕の口縁部で端部を内側へつまみ上げる。（14）の壺は体部下半が半球形を呈し、底部はやや丸みを帯びている。体部外面はカキ目調整で、底部には不定方向のヘラ削りが観察され、内面には特に強いナデが認められた。

（10，15～23）は甕である。基本的に外面は平行タタキか格子目タタキで成形され、のちにカキ目



第161図 出土遺物 1 (S=1/4)



第162図 出土遺物 2 (S=1/3・1/4)

表 7 各トレンチほかの実測不能の遺物

各トレンチほか	遺物	備考
第4 罫状区間尾部	土師器 (平安期)	
〃    内側敷石上面	土師器片	
第16罫状区間	弥生土器片?	詳細不明
T18	弥生土器片	
T29外側列石流土	須恵器片	器形不明
角楼石段表採	土師器片	
西門周辺表採	須恵器甕小片	
西門城外表採	吉備系土師器碗小片	

調整が施される。内面は同心円状タタキが大半で、(20)のように部分的にヨコナデを施す例がある。

(24)は小片からおこした土師器甑の推定復元図である。体部外面は細い縦ハケ、内面は板ナデによる調整で、底部の内外面にヨコナデが施されている。

### 3. 城壁線不明箇所の出土遺物（平成14年度）

#### 出土状況と遺物

壺B(25)は平成14年3月の踏査時に第95壘状区間の尾部付近で表採したものである。肩部と胴部の境が屈折し明瞭な稜線をもつ。壺K(26)は胴部外面の下位に回転ヘラ削りが認められる。

坏B(27)は第16壘状区間の城内側から出土した。底部外面は回転ヘラ切りの後に貼り付け、高台の形状もハ字形に開いて外傾している事が特徴である。

甕(28)は第77壘状区間のT16(第129図参照)から出土しており、盛土の上面からまとめて検出された。外面調整は摩滅のため不明であるが、内面には同心円状タタキが見られ、焼成は不良である。

壺(29)はT25の最上位の地山直上から出土した。口縁部は直立し端部を外側へつまみ上げ、肩部は丸みを帯びている。内外面とも回転ナデで成形し、頸部には接合痕が認められる。

甕(30)はT1で出土し地山整形の平坦面から検出された(第81図参照)。外面は斜方向の平行タタキ(4本/cm)の後にカキ目調整を施し、内面は同心円状タタキである。

甕(32)はT27の外側列石上面から出土した。外面は格子目タタキ(3本/cm)のちカキ目調整、内面は同心円状タタキである。

甕(33, 34)はT27の内側敷石上面の流土から出土した。(33)の外面は格子目タタキのちにカキ目調整、内面は同心円状タタキである。また(34)の外面は平行タタキ(4本/cm)のちにカキ目調整を施す。

横瓶(35)はT27の城壁後端に位置する小溝の埋土から出土しており、土塁構築時には小溝が埋められ、さらに盛土によって被覆されていることから築城時期を知る上で貴重な遺物と言える。(35)は横瓶の胴部で内面に円盤充填痕が認められ、外面は放射状の平行タタキ、内面には細い同心円状タタキが見られる。

#### その他の遺物

T18から弥生土器の甕(36, 37, 38)、壺(40)、不明鉄器(39)が出土しており、この内(36, 37, 38, 39)は弥生時代の包含層から検出された。壺(40)は土壇1から出土し、外面調整は縦方向のヘラミガキ、内面底部はヘラ削りの後1cm前後の指頭圧痕がみられる。以上の遺物は弥生後期のオノ町式期と考えられる。

内面黒色土器椀(41)は北門の北側に位置する第90壘状区間の城壁前面から出土したものである。底部の形状から概ね10世紀に比定される。

吉備系土師器椀(42, 43)は第4壘状区間の内側敷石上面の堆積土から出土した。(42)は底部径6.2cmを測り、内面の底部には径約6.3cmの重ね焼き痕が認められる。(43)は復元径10.8cm、底径5cm、器高4.2cmを測る。底部と高台の差はほとんどなく、体部下半には成形時の指頭圧痕が観察される。時期は13世紀末に比定され、この頃には第4壘状区間の内側敷石も完全に埋没したことを示している。

丸瓦(44)は通称屏風折れの石垣(突出部)の西側斜面から表採された。凸面は摩滅のため調整不

明であるが凹面には14本/cmの布目圧痕が認められる。(44)は焼成や形状から礎石建物群で表採される瓦と類似している。

#### 4. 角楼・西門周辺の出土遺物（平成15年度）

1は須恵器甕で、第1水門へいたる第9・10塁状区間の内側敷石上面で出土した。この区間は平成13年度の城壁線の発掘調査の際、須恵器甕片が数点出土した場所でもある。1の外面には3本/cmの粗いタタキの後に、不定方向のカキ目調整（9本/cm）が施され、内面には当て具痕が顕著に認められる。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。

2は土師器甕で西門上面の流土堆積から出土した。口径は約27cmを測り、外面頸部下には細いタテハケ調整が認められる。色調は淡黄色を呈し、胎土は0.5～3mmの砂粒を多く含む粗製である。

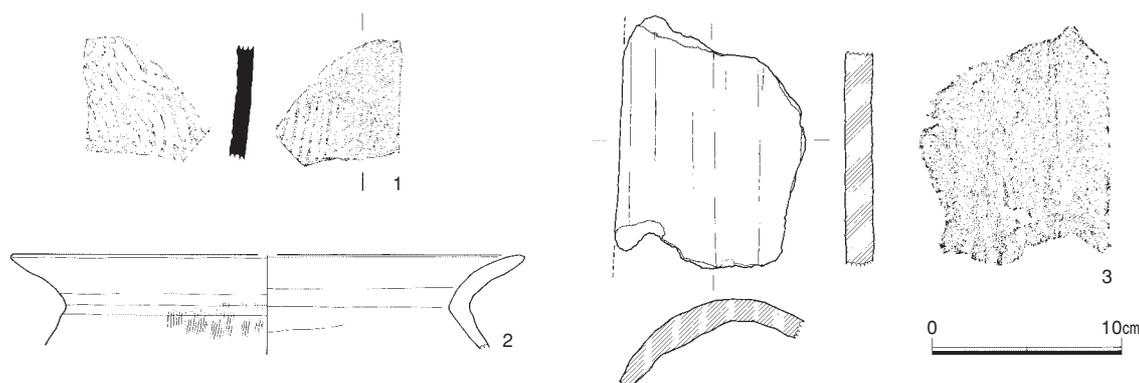
なお平成10年度の調査では西門の城内側からも土師器甕の出土を確認している。

3は第1展望台の休憩舎付近で表採した丸瓦である。凹面凸面ともに摩滅が著しく、かろうじて凹面に布目圧痕が認められる。鬼ノ城では瓦がたびたび採集しており、これまでもⅡ群礎石建物周辺に散布を確認しているが、今回の事例のように地表面から単発的に採取できるケースがあり、これらは原位置を離れ2次的に移動したものと考えられる。

#### 5. 出土遺物の時期

今回出土した遺物のうち古代山城期と考えられる遺物について述べておきたい。

出土遺物は、各所において点的に検出したにすぎず遺物自体も小破片が多いため、所属時期の評価は困難を極める。しかしながら出土遺物を観察することにより、ある程度の傾向を看取できると思わ



第163図 出土遺物3（S=1/4）

表8 実測不能の遺物

出土地	遺物	備考
平成12年度T3拡張区（本文第152図）	須恵器小片	器形不明
西門～角楼間の城壁、流土堆積出土	須恵器甕小片	平成8・10年度に出土した甕片と同じ
西門～角楼間の外側敷石上面	須恵器甕小片	1点
西門上面の流土堆積	須恵器壺小片	1点
第0水門の城内側 捨石部	黒色土器小片	器形不明
第1展望台表採	須恵器壺小片	
北門門道 北側の城外側石垣付近	土師器小片	器形不明

れるため、可能な範囲で遺物の属性を抽出してみたい。

坏B（1）は法量が小さいタイプで、底部と体部との境が明瞭に屈曲する事と、高台の形状がハ字形を呈し、(27)の高台も同様に開く。また、(27)は高台端部の先端が細くなるよう仕上げている。

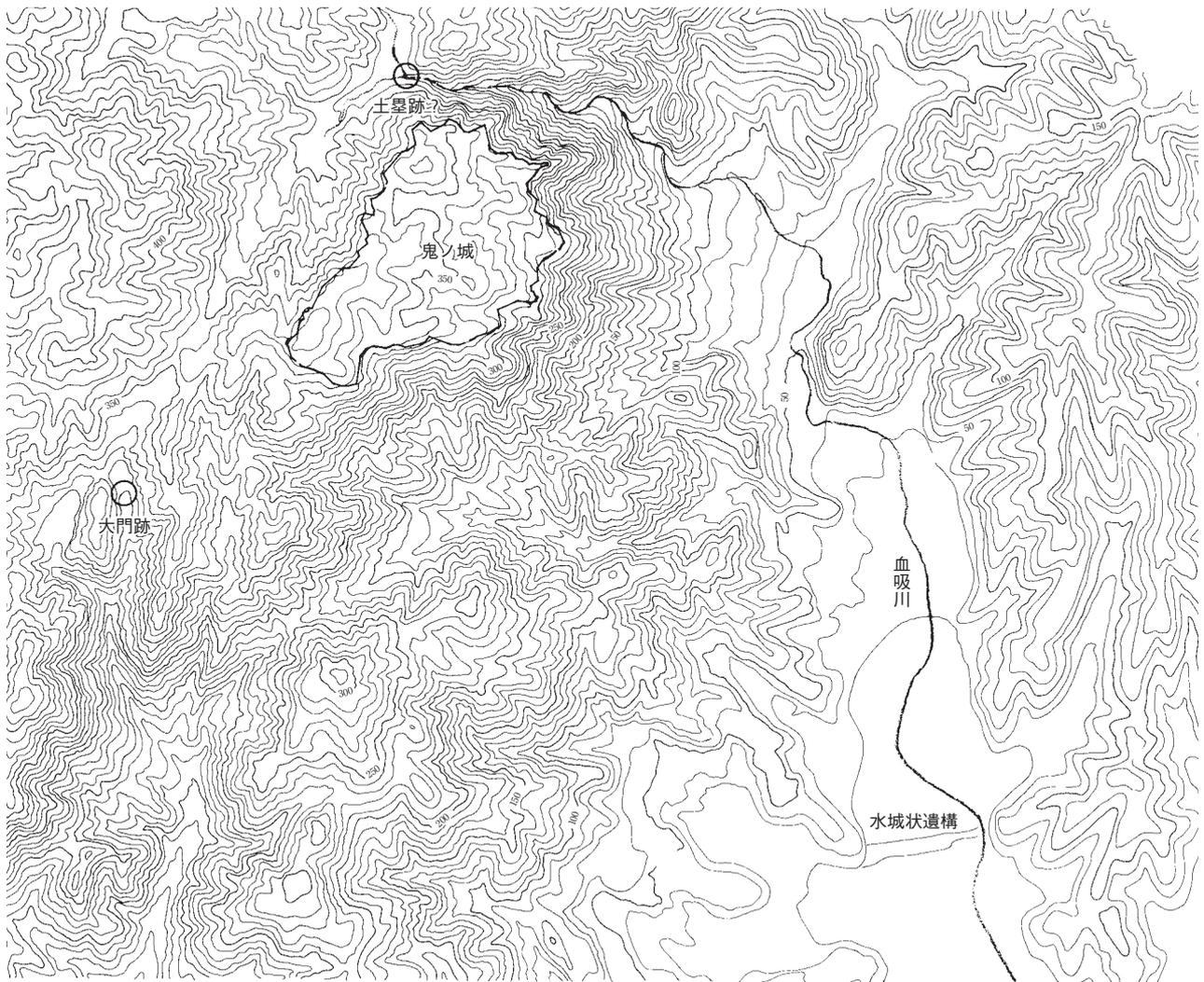
椀形坏（4）は底部に比し口縁部が長く丸みを帯びている。椀形坏は時期が新しくなる程、口径が広く器高が低くなり底部が明確になるが、一例に総社市三須河原遺跡SK03の椀形杯と比較すれば形態や径口指数と近似している<sup>(1)</sup>。

壺は壺（26）が低脚の台付長頸壺と考えられる事。また、壺K（7，8，9）の肩部がはり体部との境が明瞭な稜を持つ事が特徴である<sup>(2)</sup>。

なお、横瓶（35）は土塁内から出土した事例として貴重であるが、小片のため時期が特定できない点が惜まれる。これらの遺物は属性からみて飛鳥Ⅳ期・Ⅴ期を中心とした時期に比定することができ、「第Ⅶ章 まとめにかえて」にて後述したい。

註1 『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』16、総社市教育委員会、2003年3月

註2 （26）は底部の形状から福井大塚11号墳や、定西塚古墳出土の壺Kと類似する可能性もある。



第164図 鬼ノ城と関連遺跡図 (S=1/20,000)



第151図版 土塁跡? 遠景



第152図版 土塁跡? 近景